

武蔵野日曜集会

神殿

――ヨハネ伝第2章12～25節――

1994年3月20日

小池辰雄

キリスト自身が活ける教会堂 神の殿^{みや} 聖霊の活ける宮 地上にいても神の国の人 キリストの血によって過ぎ越される 霊体をもった神の国の宮になる

【ヨハネ2・12～25】

¹²この後イエス及びその母・兄弟・弟子たちカペナウムに下りて、そこに数日留りたり。

¹³斯てユダヤ人の過越^{すげこし}の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給う。
¹⁴宮の内に牛・羊・鴿を売るもの、両替する者の坐するを見て、¹⁵縄を鞭^{むち}につくり、羊をもみな宮より逐い出し、両替する者の金を散し、その台を倒し、
¹⁶鴿をうる者に言い給う『これらの物を此処より取り去れ、わが父の家を商売^{あきなひ}の家とすな』¹⁷弟子たち『なんじの家をおもう熱心われを食わん』と録されたるを憶^{おも}い出せり。¹⁸ここにユダヤ人こたえてイエスに言う『なんじ此等の事をなすからには、我らに何の徴を示すか』¹⁹答えて言い給う『なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起こさん』²⁰ユダヤ人いう『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは三日のうちに之を起こすか』²¹これはイエス己が体^{からだ}の宮をさして言い給えるなり。²²然れば死人の中より甦^{よみがへ}えり給いしのち、弟子たち斯く言い給いしことを憶い出して聖書とイエスの言い給いし言とを信じたり。

²³過越のまつりの間、イエス、エルサレムに在^{いま}すほどに、多くの人々その為し給える徴を見て御名^{みな}を信じたり。²⁴然れどイエス己を彼らに任せ給わざりき。それは凡ての人を知り、²⁵また人の衷^{うち}にある事を知りたまえば、人に就きて証する者を要せざる故なり。

●キリスト自身が活ける教会堂

¹²この後イエス及びその母・兄弟・弟子たちカペナウムに下りて、そこに数日留りたり。

「カペナウム」はガリラヤ湖の北の方で、キリストの伝道の根拠地みたいな所です。



13 斯てユダヤ人の過越^{すぎこし}の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給う。
14 宮の内に牛・羊・鴿を売るもの、両替する者の坐するを見て、
宮の内に商売屋が来ている。

15 縄を鞭^{むち}につくり、羊をもみな宮より逐い出し、両替する者の金を散し、その台を倒し、¹⁶ 鴿をうる者に言い給う『これらの物を此处より取り去れ、わが父の家を商売^{あきない}の家とすな』

これは神を瀆^{けが}す行為だから、とんでもないということ、キリストも怒ると、こういう行動に出る。キリストは決して単にただ優しいひとではない。普通の人のできないようなことを始める。弟子たちはこれを聞いて、

17 弟子たち『なんじの家をおもう熱心われを食^{くら}わん』と録されたるを憶い出せり。

これは詩篇69篇にある。

「7 我はなんじのために謗^{そし}を^おい恥はわが面^{かお}をおおいたればなり。⁸ われわが兄弟には旅人のごとく、わが母の子には外人^{あだしひと}のごとくなれり。⁹ そはなんじの家をおもう熱心われを^{くら}い汝を^そしるものの謗^{そし}われにおよべり。」(詩篇69・

7・9)

「神の家をおもう熱心」という。

18 ここにユダヤ人こたえてイエスに言う『なんじ此等の事をなすからには、我らに何の徴を示すか』

何か奇蹟を見せろと言う。

19 答えて言い給う『なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起こさん』

こんなことはキリストでなければ言えない。「三日でもつて建てるぞ」と、ユダヤ人はその意味はわからない。

20 ユダヤ人いう『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは三日のうち²¹に之を起こすか』これはイエス己^{からだ}が体の宮をさして言い給えるなり。

この21節が大変なことです。神殿だとか、お宮だとか、お寺だとか、建物はどうでもいいんだということ。ところが、東西どちらでもきらびやかな大きなものを建てる。ヨーロッパへ行っても大きな教会堂があるし、こちらにもお宮だとかお寺だとか、みな大袈裟なのが大いに有難がる。内村鑑三が「無教会主義」というのを始めたのは、

「そんなことではない。教会堂は要らん。どこへ行つてやつたつて、山へ行つてやろうが、海辺でやろうが、誰かの家を借りてやろうが、そんなことはどうでもいいんだ」

というのが内村先生の気持だったわけだ。それで「無教会」なんてな言い方をした。教会が無いのではない。「教会堂は要らない」ということです。「無教会主義」というのはヘタす



ると誤解される。教会がなかったらしようがないんだ。教会というのはキリストの体だから、信者の集まりが教会なんだから。「教会」という訳が本当はおかしい。信徒の集まりということです。

21 これはイエス己が体の宮をさして言い給えるなり。

この21節が大事な節です。キリスト自身が活ける教会堂なんだ。

●神の殿

歴代志略上29章に、

「ダビデ王また全会衆に言いけるは我子ソロモンは神のただ独り選びたまえる者なるが少くして弱くこの工事は大なり。これは人のために非ず、エホバ神のためにするものなればなり。……

「殿は神のためにする」という。けれども、別なところで、

「そんなものは要らない。天地が自分の宮である」

ということ、エホバ神の示しで預言者に言っているところがあります。

11 エホバよ権勢と能力と栄光と光輝と威光とは汝に属す。凡て天にある者地にある者はみな汝に属す。エホバよ国もまた汝に属す。汝は万有の首と崇められたもう。12 富と貴とは共に汝より出づ、汝は万有を主宰たもう。汝の手には権勢と能力あり。汝の手は能く一切をして大ならしめ又強くならしむるなり。13 然れば我らの神よ、我ら今なんじに感謝し汝の尊き名を讃美す。14 但し我らかくのごとく自ら進んで献ぐることを得たるも我は何ならんや、また我民は何ならんや、万の物は汝より出づ。我らはただ汝の手より受けて汝に献げたるなり。」(歴代志略上29・1：11～14)

この辺は非常に福音的な言葉ですね。

「何でも与えられているので、自分がつくったものなんかありはしないんだ、みな全部神さまのものだ」

と。旧約では、「神の殿」ということ、

「宮は神のためだ」

ということが言われている。

列王記略上の5章と8章に神殿のことが書いてある。

「汝の知ることく我父ダビデはその周囲にありし戦争に因りてその神エホバの名のために家を建てること能わずしてエホバが彼等をその足の跣の下に置きたもうを待てり。」(列王記略上5・3)

「16 即ち我は吾民イスラエルをエジプトより導き出せし日より我名を置くべき家を建てしめんためにイスラエルの諸の支派の中より何れの城邑をも選み



しことなし。ただダビデを選びてわが民イスラエルの上に立しめたりと言いたまえり。¹⁷それイスラエルの神エホバの名のために家を建つことはわが父ダビデの心にありき。……

²⁷神果して地の上に住みたもうや、視よ天も諸の天の天も爾を容るに足らず。まして我が建てたるこの家おや。²⁸然どもわが神エホバよ僕の祈禱と懇願を顧みてその号呼と僕が今日爾のまえに祈る祈禱を聴きたまえ。²⁹願くは爾の目を夜昼この家に即ち爾が我名はそこに在るべしといったまえる処に向かいて開きたまえ。願くは僕のこの処に向かいて祈らん祈禱を聴きたまえ。³⁰願くは僕と爾の民イスラエルがこの処に向かいて祈る時に爾その懇願を聴きたまえ。爾は爾の居処なる天において聴き聴きて赦したまえ。」(列王記略上8・16～17、27～30)

「エホバの名のための家」と、どこまでも神殿は神さま中心であつて人間のためではない、というような意味で言っているわけです。

●聖霊の活ける宮

新約では、コリント前書6・19に、

「¹⁴神は既に主を甦えらせ給えり、又その能力をもて我等をも甦えらせ給わん。

¹⁵汝らの身はキリストの肢体なるを知らぬか、

我々の体はキリストとつながっている。「肢体」というのは枝葉ということ。

然らばキリストの肢体をとりて遊女の肢体となすべきか、決して然すべからず。¹⁶遊女につく者は彼と一つ体となることを知らぬか『二人のもの一体となるべし』と言ひ給えり。¹⁷主につく者は之と一つ霊となるなり。

この17節が大事ですね、「キリストにつく者は之と一つ霊となるなり」と。

¹⁸淫行を避けよ、人のおかす罪はみな身の外にあり、されど淫行をなす者は己が身を犯すなり。¹⁹汝らの身はその内にある、神より受けたる聖霊の宮にして汝らは己の者にあらざるを知らぬか。

19節が大事な節です。私たちはキリストを受けとったかぎり「聖霊の宮」である。我々自身が「聖霊の活ける宮」であるということ。我々自身は一人一人が神殿だという。

²⁰汝らは価をもて買われたる者なり、然らばその身をもて神の栄光を顕せ。」(コ

リント前6・14～20)

「価をもて買われた」とは十字架の贖罪のことです。これはとんでもない価、無限の価です。十字架でもって買われた。然らばその身をもて神の栄光、キリストの栄光を顕せと。我々は聖霊の活ける宮だという。

黙示録21章は決定的な言葉です。



「²²われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊はその宮なり。

天の都には神殿がない。神さまとキリストが活ける宮だ。だから、いわゆる神殿ではないと。²³都は日月の照すを要せず、神の栄光これを照し、羔羊はその燈火なり。

これは非常に霊的な現実です。こういう霊的な現実は冥想するよりか仕方がない。冥想してそういう光の現実の中に入る。ダンテの『神曲』の天国篇もこういう言葉にはかなわない。

²⁴諸国の民は都の光のなかを歩み、地の王たちは己が光榮を此処に携えきた

る。²⁵都の門は終日閉じず（此処に夜あることなし）²⁶人々は諸国の民の光榮と尊貴とを此処にたずさえ来らん。²⁷凡て穢れたる者、また憎むべき事と虚偽

とを行う者は、此処に入らず、羔羊の生命の書に記されたる者のみ此処に入るなり。」（黙示録21・22～27）

キリスト者というのは、いい加減なことではなれない。

要するに、パウロの手紙を見ても分かりますけれども、

「我々自身が活ける宮であつて、お寺がどうだ神殿がどうだという、いわゆる建物の問題ではない」

と。内村先生の無教会主義はその見当でいったんだけでも、今度は本当に

「我々自身が宮である」

というところまでははつきり言わない。それは聖霊の受けとり方がまだ弱かったからです。

●地上にいても神の国の人

我々自身が神殿である。神の家、神の宮。だから、我々は神族、神の族なんだ。キリストによつて神の子とされていくわけだから、神族だ。要するに、地上にいても神の国の人だ。

「われらの国籍は天にあり」

とパウロが言った。そういう意味においては、もう天も地も一つになってしまう。コロサイ書1・17に、

「¹⁷彼は万の物より先にあり、万の物は彼によりて保つことを得るなり。¹⁸而して彼はその体なる教会の首なり、彼は始にして死人の中より最先に生まれ給いし者なり。これ凡ての事に就きて長とならん為なり。」（コロサイ1・17～¹⁸）

「教会の首」とある。パウロの手紙の中には体とか宮とか、そういう言い方をよくしている。建物に譬えているところもある。その基はキリストで、預言者と使徒がその次で、それから信徒であるなんて言っている。エペソ書2章に、

「²⁰汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト・イエス自らその隅の首石たり。²¹おのおのの建造物、かれに在りて建て合わせられ、いや増しに聖なる宮、主のうちに成るなり。²²汝等もキリストに在りて共に



建てられ、御霊によりて神の御住となるなり。」(エペソ2・20～22)

建物に例えている。「御霊によりて神の御住となる」、聖霊によって神の住まいとなるという。

「⁶即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに在りて共に世嗣となり、共に一体となり、共に約束に与かる者となる事なり。」(エペソ3・6)

と、いろいろな言い方をするわけだ。

●キリストの血によって過ぎ越される

¹³斯てユダヤ人の過越の祭ちかつきたれば、イエス、エルサレムに上り給う。

とある。「過越の祭」は出エジプト記12章に出ている。

「エホバ、エジプトの国にてモーセとアロンに告げていたまいけるは、

²此月を汝らの月の首となせ汝らは是を年の正月となすべし。……

「此月」とはアビブの月またはニサンの月といつて3～4月の頃です。向こうでは春が正月だ。

⁷その血をとりて其之を食う家の両旁の柱と鴨居に塗るべし。⁸而して此夜そ

の肉を火に炙て食い又酔いれぬパンに苦菜をそえて食うべし。……¹¹なんじ

らくく此を食うべし即ち腰をひきからげ足に靴を穿き手に杖をとりて急ぎて

之を食うべし、これエホバの逾越節なり。¹²是夜われエジプトの国を巡りて

人と畜とを論ずエジプトの国の中の長子たる者を尽く撃殺し又エジプトの

諸の神に罰をこうむらせん。我はエホバなり。¹³その血なんじらが居ると

ころの家にありて汝等のために記号とならん。我血を見る時なんじらを逾越

すべし又わがエジプトの国を撃つ時災なんじらに降りて滅ぼすことなかるべ

し。¹⁴汝ら是日を記念えてエホバの節期となし世々これを祝うべし、汝等之

を常例となして祝うべし。¹⁵七日の間酔いれぬパンを食うべし。その首の日

にパン酔を汝等の家より除け。凡て首の日より七日までに酔入たるパンを食

う人はイスラエルより絶るべきなり。」(出エ12・1～15)

「³モーセ民にいいけるは汝等エジプトを出で奴隷たる家を出るこの日を誌え

よ、エホバ能ある手をもて汝等を此より導きいだしたまえばなり、酔いれた

るパンを食うべからず。……⁶七日の間なんじ酔いれぬパンを食い第七日に

エホバの節筵をなすべし。」(出エ13・3～6)

「酔いりのパンを食べてはいかん」と書いてある。それは出エジプトするときには非常に急

いで出かけなければならなかったから。酔を入れると酩酊するでしょ。これは除酵なんです。

それで除酵節という設定もあるわけです。「過越」とは、

「その血なんじらが居るところの家にありて汝等のために記号とならん。我血

を見る時なんじらを逾越すべし」

ということからきている妙な言葉です。血なまぐさい内容ですけれども。ということとは、



これを今度は新約の方でいうと、福音的にいうと、キリストの血によって過ぎ越されるわけです。キリストの血の贖いで、我々は罪から、罪を問われなくて過ぎ越される。即ち、救われることになる。そこからだんだんそういうことになるんだね。妙なことです。過越とはそういうところから来ている。出エジプト記12章はその意味で大事なところですよ。ヘブライ語では「ペサツハ」という。パス・オーバー、「過ぎ越す」ということ。

「⁶汝らの誇りは善からず、少しのパン種の、粉の団塊をみな膨れしむるを知らぬか。⁷なんじら新しき団塊とならんために旧きパン種を取り除け、汝らはパン種なき者なればなり。それわれらの過越の羔羊、即ちキリスト既に屠られ給えり、⁸されば我らは旧きパン種を用いず、また悪と邪曲とのパン種を用いず、真実と真との種なしパンを用いて祭を行ふべし。」(コリント前5:6-8)

「汝らはパン種なき者なればなり」とは、「過ぎ越された者」ということの別な表現なんです。我々はキリストの血によって過ぎ越されて、罪を問われなくて、救われる。過ぎ越されないと、エジプト人のように殺されてしまう。そういう古い事柄から、福音的な解釈にパウロが使っているわけです。

●霊体をもった神の国の宮になる

それと、大事なところは

「我々は聖霊の宮である」

というコリント前書6章19節のところで、コリント前書3章16節の

「神の宮である」

というところ。それから、

「宮はないけれども、神とキリストが活ける宮である」

という黙示録21章22節。要するに、我々が活ける神殿、活ける宮であるということ。それがキリスト者の自覚でなければいかん。そして、その活ける宮の中にあるものはキリストの霊、聖霊である。聖霊がなければ、活ける宮ではありえない。聖霊を受ける土台は十字架です。十字架の血によって過ぎ越されたから。そういう連関になるわけです。だから、十字架と聖霊は離すわけにいかない。

それが今日の、過越と宮のところが、ヨハネ伝2章12節から22節までの中心です。そして、イエス・キリストが誰よりも最もはつきりした神の宮であるわけです。だから、十字架に架かつて滅びない。復活したキリストは霊的な宮です。我々がまた、肉体は滅びても、今度は新しく霊体がある。向こう側にいくと今度は霊体をもったところの宮、神の国の宮になるわけです。神の国の宮は霊体をもっている。ダンテの『神曲』の天国篇をみても、そこらははつきり言われてないね。あれは幻の世界だから仕方がない。それが今日のお話の中心であります。

